

片桐棲龍堂庭園の調査復元について

福原成雄

はじめに

約400年の歴史を持ち漢方専門薬局として知られる片桐邸「片桐棲龍堂」は、堺市の北部、堺市西湊町を南北に通る旧紀州街道から1本東の中筋と阪堺電軌阪堺線とに挟まれた中ほどに位置する老舗の漢方薬専門店である。敷地内には江戸時代後期に建築された主屋をはじめとする建築物があり、「大仙栽（おおせんざい）」と呼ばれている主屋前の坪庭と坪庭に続く東側に築山林泉式風庭園が広がっている。（図-1参照）平成16

年に現況実測調査を行った際には、二つの築山とその合間に設けられた枯滝石組、そして枯流れが庭の周囲を大きく回り込む形で作られ、流れの二カ所に大降り（おおぞり）の石橋を架け、沢飛び（さわとび）を設けて庭園景とし、庭園意図までは、理解出来なかった。平成19年度、支障木の移植、飛石の据え直しを行ったところ、地中に埋没していた砂雪隠（さゆきん）、二箇所の蹲踞（つんぎょ）、飛石等を発掘した。築山林泉式庭園と思われていた庭園が、本格的な露地の構成を持った庭であることが分かった。（写真-1. 2. 3. 4. 5. 6. 7参照）庭園の調査と復元内容について報告する。

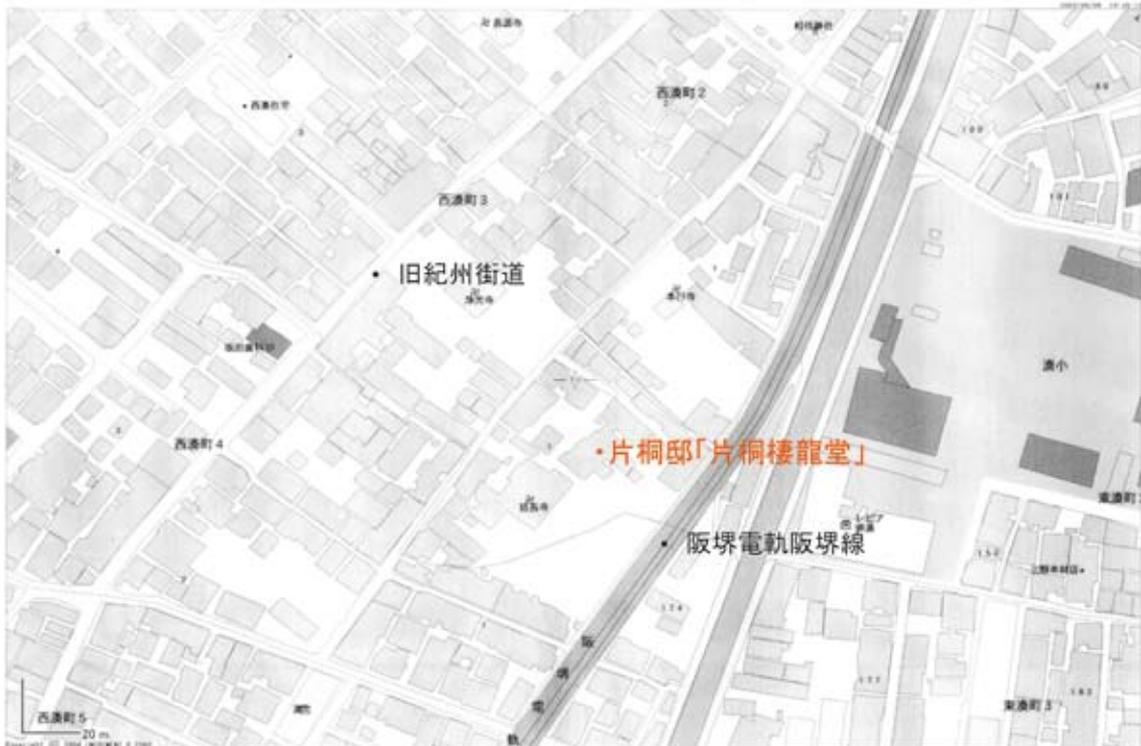


図-1 片桐邸位置図

1. 周辺部の環境

片桐邸周辺部は、戦災を受けず多くの江戸時代後期頃の社寺、民家の建物が点在し、趣のある街を形成し

ており、片桐棲龍堂庭園は、市街地の中にあり、貴重な緑を町に提供している。しかし、反面道路が狭く、密集地化しており災害時の被害が心配される地域でもある。



写真-1 北西側道路



写真-2 北西側道路



写真-3 北側の入口門



写真-4 東南に広がる大仙栽の庭



写真-5 大仙栽の庭園



写真-6 大仙栽の庭園



写真-7 大仙栽の庭園

片桐棲龍堂庭園「大仙栽」は、主屋が建築された江戸時代後期頃、同時に作庭されたと考えられるが、その後、順次、改変が行なわれている。近年になって、阪堺線の敷設、隣地の改変等により、規模が縮小され中心部の滝、流れ部分の骨格のみが残った庭園となっている。

2. 「片桐棲龍堂」と建築

「片桐棲龍堂」は豊臣秀吉より現在の土地を賜り、桃山時代からこの地に館を構え、当主が代々「寛龍」の名を継承、棲龍堂は龍の名前のものが住む館という意味と、風水学での龍穴上に建てられた館であるとの2つの意味があり、「片桐棲龍堂」と名づけられたと言い伝えられている。江戸時代は岸和田藩や和泉・伯太藩の御典医を勤め、また近隣の人々に医薬を無料で施して来たが、明治に入って法制が変革され、家伝漢方薬の製造販売の許可を受け、今日に至っている。

現在は漢方専門の薬店として、今日まで伝えられてきた日本漢方を基礎に置き、中国の伝統医学である中医学をもとにして作られた中成薬なども取り入れ、「生・病・老に対する漢方的な考え方を分かりやすく説

明」し、伝統医学の素晴らしさをも承継している。

当家は、伝来した医学資料の他、全国規模での漢方資料を収集することから海外にも知られており、伝統的な建築の活用に加えて漢方資料の収集展示は大変珍しく、訪れる一般の方々にも分かり易く解説展示がされている。

「片桐棲龍堂」の建築は、主屋（江戸文化年間1804～1817年）、東ノ蔵（嘉永年間1844～1853年）、大阪市中から移築された中ノ蔵（嘉永年間）、鎮守社に相当する摩利支尊天神社廟（文化11年頃1814年）、西ノ蔵（江戸後期1868年）、中ノ蔵と東ノ蔵の間には地元産の煉瓦を敷き詰めて洗い場（明治初期1868～1872年）、庭園からの目隠しとしての屋根付の煉瓦塀（明治初期）の主屋、蔵等7件が、平成12年10月18日に国の登録有形文化財に登録されている。主屋は6間取平面の2階建て町屋であり、文化年間の記録や襖絵が所在することから江戸後期の建築と考察されている。また、西ノ蔵は日本では、四百年以上の歴史的な経緯と遺品の数々を隣接する漢方資料館とともに展示し、数少ない漢方医薬専門資料館として国内外の専門家からも高く評価を得ている。（図-2参照）（写真-8、9参照）



写真-8 入口通路



写真-9 主屋内部から庭園を見る

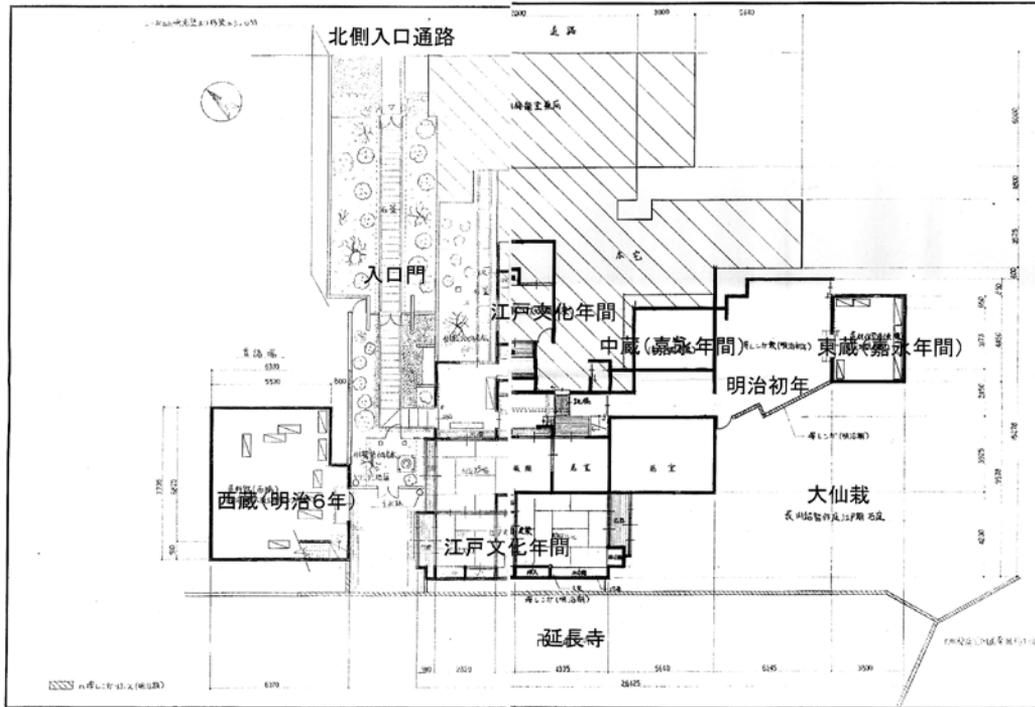


図-2 登録文化財片桐邸概略図

3. 庭園概要

敷地は、豊臣秀吉より拝領し、元和年間（1615～1623年）から庭園が存在していたが、文化二年（1805年）に片桐音之輔方矩が、旧庭園を改造して京都より藪内宗匠（六代目比老斎紹智）を招いて、茶室を建て、居宅を栄松庵、千巢庵と呼び、大徳寺の座主を迎え、茶事に明け暮れたと伝えられている。（図-3参照）

旧庭園を改造して「大仙裁（おおせんざい）」と呼



図-3 片桐音之輔方矩像軸巻（片桐家蔵）

ばれている庭園は、阪堺線に接する東側沿いに眺望を意図した高さ約2mの築山と、岩山の築山を築き、築山中央部から高さ約1.5mの落口を持つ滝を落とし、滝口前の高みに自然石の石橋を架け深山幽谷の景を現している。溪谷に架かる石橋下部からの流れが岩山を回り込むように流れ下り、岩山の取り付きに沢飛石を配石し、築山の表情を豊かにしている。築山のからの流れは、南側延長寺境界の壁沿いに流れ、もう一流れが、主屋北側の湧水を表した小池から坪庭前を南に流れ下る。坪庭前の流れにも、流れの景を豊かにする見事な石橋と沢飛石が低く配石され、この字型に南側延長寺境界中央で滝口からの流れと合流し、庭園中央の大判平石を中心とする平坦部分を取囲むように設けられている。流床は、タタキ土にφ50～100mm内外の玉石が埋め込まれて仕上げがされ、流れの要所には乱杭が景色を作り、石橋下部から下流部に向かって高さを微妙に下げ、流れに広がりや深みを演出している技法は

見事である。

これら庭園施設を巡るように飛石が配石され、坪庭から大判平石の中央部に渡り両築山を觀賞できるように作られている。

4. 現況測量調査と概要

庭園平坦部の大判平石を中心にして、坪庭、築山を廻るように飛石が絶妙に配石されている。平成16年8月に滝、流れ等の石組石材、飛石石材、植物の実測調査を大阪芸術大学環境デザイン学科 福原研究室が行った。建物に接して坪庭、その東に江戸後期1805年頃に

作庭された築山、枯滝、枯流の築山林泉式枯山水庭園内容を確認した。(写真-10.11.12.13.14.15.16.17.18.19.20.21.22.参照)(図-4 庭園実測)

4-1 庭園調査概要

- 1) 滝、流れ等の石組石材、飛石石材、植物の実測調査を行ない、これら庭園内容を確認した。
- 2) ツバキ・シダレザクラ・サルスベリ・草花が所狭しと植栽され露地の雰囲気ではなかった。
- 3) 成長しすぎた地被類が飛石に被さり、庭園の姿が分からなかった。
- 4) 藪内流家元作庭露地の雰囲気ではなかった。
- 5) 築山林泉式庭園の雰囲気である。



写真-10 入口通路の実測



写真-11 入口庭の実測



写真-12 入口井筒の実測



写真-13 坪庭の実測



写真-14 大仙栽の実測

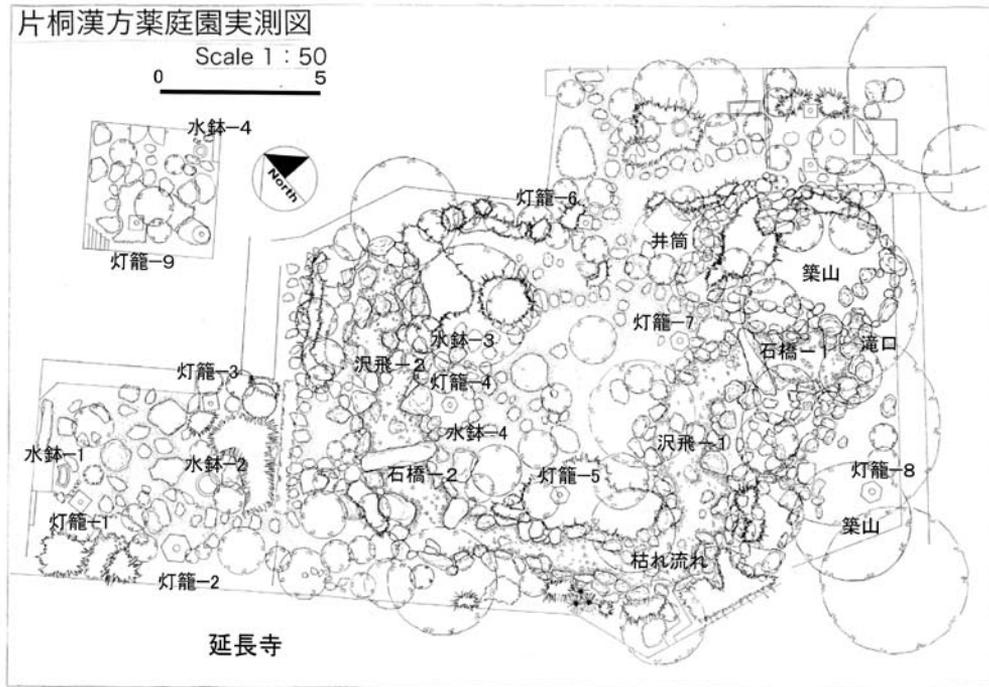


図-4 庭園実測図（環境デザイン学科 福原研究室作図）



写真-15 滝口



写真-16 築山



写真-17 石橋



写真-18 沢飛



写真-19 枯流れ



写真-20 石橋



写真-21 沢飛

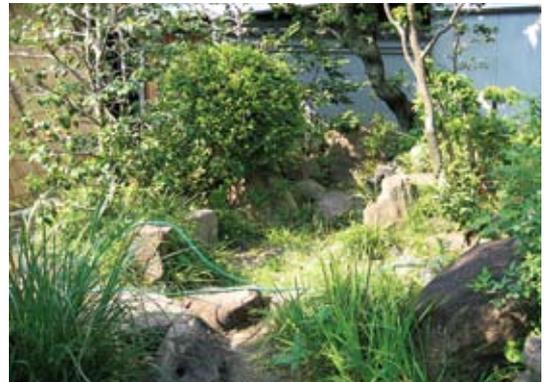


写真-22 枯流れ

4-2 各種石造物の実測

各種灯籠9基、水鉢4基は、江戸時代に多く作られた創作物で、灯籠では、竿に梟が彫り込まれたユニークな灯籠があり、橋の欄干を転用した灯籠が作られ、水鉢には、蛙形、鉄鉢形、扇形、棗形、名称入りの井筒等庭園作者の遊び心を感じさせる石造物が庭園の適所に配置されている。

灯籠-1 実測

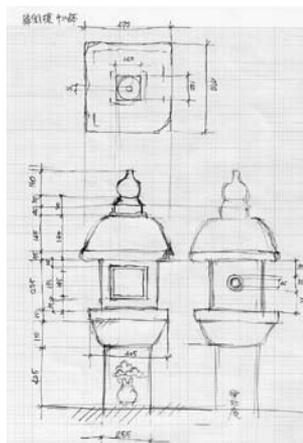


図-5 灯籠実測図



写真-23 竿に梟が彫り込まれている。

灯笼-2 実測

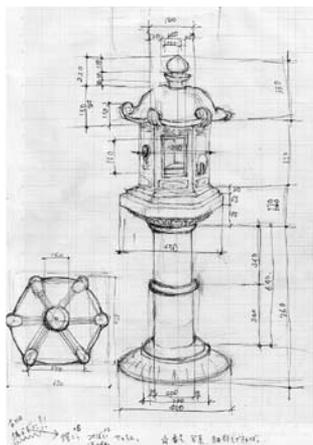


図-6 灯笼実測図



写真-24 春日灯笼

水鉢-1 実測

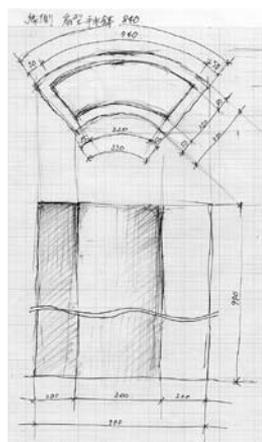


図-7 水鉢実測図



写真-25 扇形水鉢

水鉢-3 実測

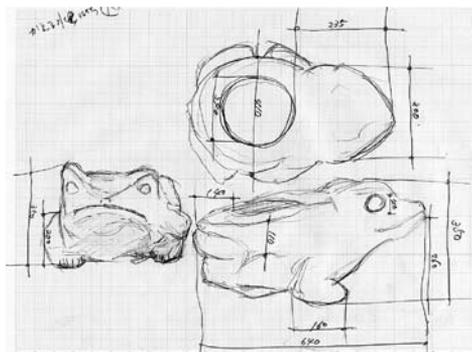


図-8 水鉢実測図



写真-26 蛙形水鉢

5. 庭園復元工事（平成19年5月～8月）

平成19年度、これら飛石の据え直しを目的に大阪芸術大学環境デザイン学科 福原研究室指導により、復元整備工事を進めたところ、築山林泉式庭園と思われた庭園が、築山、滝、流れを配した奥山の景色の中に作られた露地の形態を持った露地庭であることが分かった。庭園は、大判平石が連客石であり、貴人石を配石した腰掛け待合いであること、腰掛け待合いからの飛石が、樹木、土砂に埋もれていた蹲踞、砂雪隠、大判平石前の蹲踞に続いていることが明らかになった。飛石の配石も見事で、沢飛び、石橋の配置、護岸石組も

自然に作られている。庭園は、外露地で、腰掛け待合から主屋前の内露地に至る構成である。茶道を大成した千利休が生まれ育った堺市の地に、このような本格的な露地庭が現存していたことは大変貴重である。

この「大仙裁」をできる限り江戸期の当初の風情に戻す復元整備工事を行なっている。平成19年度は、主に飛石の据え直し、南宗寺由来の利休に因むツバキの薬草園よりの移植、土壌改良や排水設備等を行った。

5-1 地被植物の抜取り移植工事



写真-27 地被植物の抜取



写真-28 ツバキの掘り取り移植

5-2 堆積土の切り取り工事



写真-29 飛石周りの堆積土切り取り

5-3 飛石据え直し工事



写真-30 飛石据え直し

5-4 蹲踞復元工事



写真-31 蹲踞役石の据え直し

5-5 補植工事



写真-32 アカマツ補植工事

5-6 完成 沢飛-1 沢飛-2 石橋-1 石橋-2



写真-33 沢飛-1の完成



写真-34 沢飛-2の完成



写真-35 石橋-1の完成



写真-36 石橋-2の完成

5-7 復元 蹲踞-2

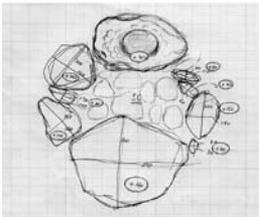


図-9 蹲踞実測図



写真-37復元を行った蹲踞

復元 蹲踞-1

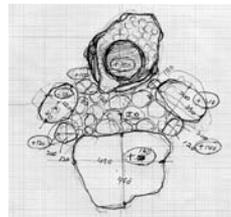


図-10 蹲踞実測図



写真-38

5-8 砂雪隠の発掘復元

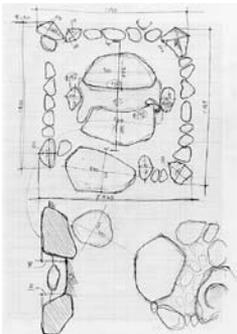


図-11 砂雪隠実測図



写真-39復元を行った砂雪隠

5-9 砂雪隠の事例



写真-40 砂雪隠の役石

5-10 腰掛待合跡整備工事



写真-41 写真-42 写真-43 発掘により復元を行った腰掛待合

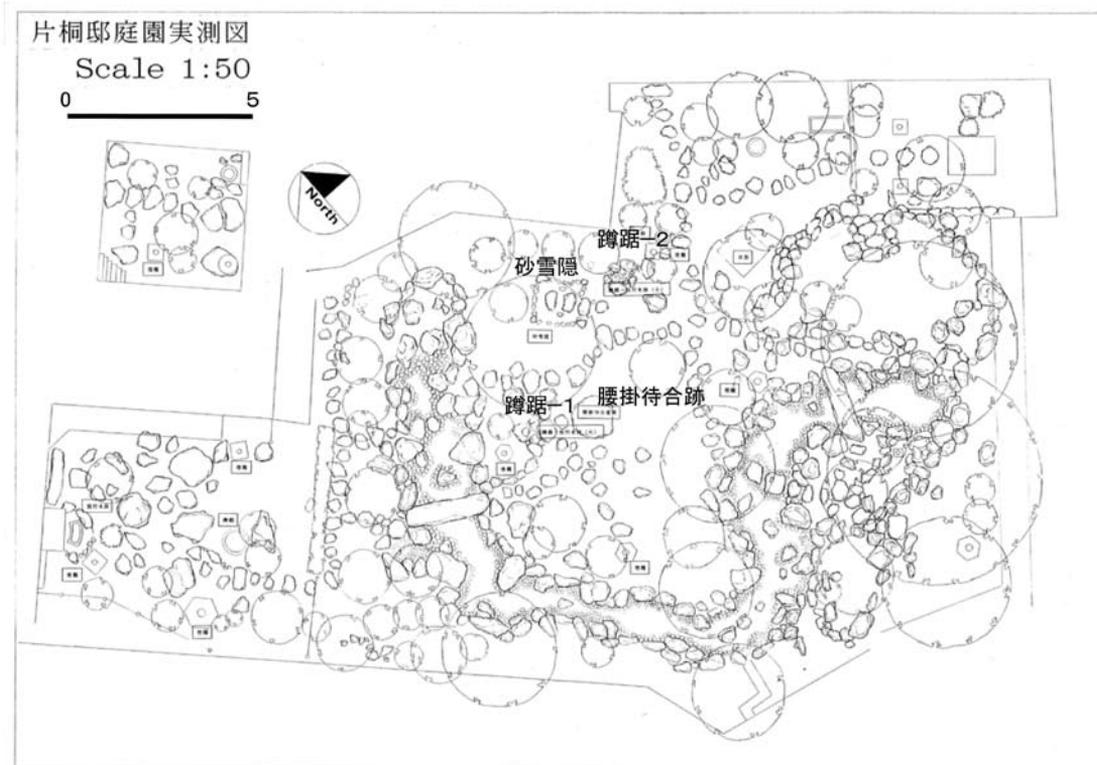


図-12 片桐棲龍堂庭園完成実測図（環境デザイン学科 福原研究室作図）

6. おわりに

鑑賞本位と思われた町屋の庭が、本格的な露地庭として姿を現した。言い伝えて、京都藪内流家元の設計による茶庭であると聞かされていたが、現況庭園の姿からは、家元が関わった露地の形態とは見えなかった。しかし、今回の復元整備工事で、当主が庭園全体に植えられていたツバキ、草花を取除き、堆積した表土を切り取りしたところ、発掘した露地の庭園施設内容から枯れ流れによって区切られた二重露地の構成であることを確認した。しかし、何時頃、誰によって作られたのか、記録は何も残されて居らず、庭の姿と、言い伝

えからそれらを考察した。庭園の価値は、今回の調査、及び復元整備工事により明らかであり、保存整備される必要がある。今後は、周辺の町家に残る同年代の庭園の現況実測調査を行うことにより、その類似性、時期を少しでも明らかにしたい。片桐棲龍堂庭園の調査、復元整備工事は、片桐家十七代目片桐平智当主の熱意により行われた。

参考文献

「片桐棲龍堂」作成のパフレット
登録有形文化財登録文書 平成12年10月18日

